詩

いのち　いのち　いのち

高椋竜生

正月五日。
三川鉱坑底で
チップラーに頭をうち砕かれ
なかまが　殺された

カープッシャーが故障というのに
出炭第一主義のラッパを吹きつづ
ける
収奪屋の殺人合理化で
あっけなく　いのちを断たれた
まだ四十四才という働きざかりの
鉱山の男、
人生はこれからだ　というのに

かって
爆発のたび
坑内火災のたび
落盤のたび
テレビも新聞も
ほんのチョッピリ
そのときだけ
うわべだけの悲しみと涙をちら
　つかせただけで
ほんとうの人間の悲しみの深さ
　と涙の重さを伝えようとも
　しなかった
　ばかりか
たぎる怒りの火をかき消すため
　につかわれた
かれの死を　自分の死とうけと
　めないかぎり
つぎつぎなかまのいのちはかき消さ
れ　人間の悲しみの絶える日
　は来ない

いのち　いのち　いのち
怒り　怒り　怒りの抗議ストで
闘うなかまのいるかぎり
いつか　悲しみを怒りの火で
かき消す日が　かならず
やってくる

いま　働くものの心の隙間をつ
いて
三井鉱山は石炭の第二会社化を
ねらっている

おれたち　鉱山の男たちが
血と涙であがなってきたこの鉱
山だ　みすみす　いいなりには
させぬ
きょうの日に流した涙を涸らし
てはならぬ
怒りの火を消してはならぬ
おれたちのささやかなしあわせの
ためにも

世のなかでいちばんとうときもの
それは　いのち　いのち
死んだ　なかまの　こだまがか
えってくる
それは　いのち　いのち　いのち

発見

うずき

病院のベッドの上で

新港分会　大久保信

真夜中のようなヤミの中で、思いきり窓をひらく。

ひんやりと、朝風が頬に冷い。

私の心の疼きが始まる。今日も一日、この疼きとともに同居せねばならぬのかと溜息が出る。

一滴一滴ポトポトと落ちる点滴の白いビンを眺めながら、また自分の命ののびたことを思う。

だが心の疼きは、それでも私につきまとって離れない。今日を無事であることを、感謝しながらも。

悲しみと喜びが交叉する中で、再び疼きはよみがえる。青く澄んだ大空の下で、波しぶきと遊びながら、好きな歌を愛唱した時の、乙女の心の疼きとはまったく別なもの。

夫と娘との幸福を築こうとしてはくずれ去っていった哀しみに、疼きは激しく胸をさす。

運ばれてくる食膳にも何か気がのらず、箸が動かぬ。来客があれば、しばし心の疼きも快楽の疼きに一変する。

病室で一人寝のしじまの中でコトコトと廊下を行く人の足音「ああこの人もこの疼きに終始のたうちまわされているのだろうか」

だが考えて見れば、この疼きがあるが故に、命の尊さを感じるのかも知れない。

暗い電灯の下で、涙をふきふきペンをにぎる私だ。

×

大久保さんは、三井病院（天領町）に入院、長く闘病生活を送っている人で、みんなで暖かくはげましてあげよう。

守る会加盟者紹介

次に紹介する人びとは、十一月中に"CO患者守る会"に加盟された人びとです。命を守るため、反合理化のため共に手をとり合って力強く前進しましょう。

須藤　高義　宮崎県東臼杵郡北川　藤井　達正　愛知県豊橋市南栄町
前田三重子　〃　延岡市川島町　渋田　隆　大牟田市大字今山
定　政強　〃　伊達町　古賀　郁代　〃　明治町
黒木　繁夫　〃　沖田町　才田　征二　荒尾市日ノ出町
田嶋　洋一　〃　大貫町　末松　宏　九州大学守る会
大下　和明　〃　緑ケ丘　橋本　武　〃
深谷　潤一　〃　恒富町　中神　秀子　東京都太田区調布
江島　俊之　福岡県久留米市西町　赤木　由子　〃　三鷹市下連雀
熊丸　和男　〃　〃　野中　古内　和子　浦和市本太四―六
井芹　義雄　熊本県荒尾市桜山町　下木　敬徳　埼玉県越谷市瓦曽根
農中　茂徳　千葉県野田市野田　川田　晃生　〃　大里郡花園村

千明喜久夫　〃　秩父郡皆野町　宮脇　忠雄　〃　花園町　丸尾　育郎　〃　奥田　孝雄　〃
浜中　正　〃　荒川村　渋川　正　〃　〃　吉田　俊郎　〃　吉武美代子　〃
斉藤　吉男　東京都目黒区中目黒　大西　孝　香川県坂出市府中町　都知木　豊　〃　永滝　操　〃
林　撰　高松市太田上町　浜本　保　〃　丸亀市塩屋町　島田美恵子　〃　三井　三代　〃
谷木　正広　〃　木太町　谷口　勝行　〃　香川郡香川町　佐尾　猛　〃　辻　純　〃
安藤　徹雄　〃　仏生山町　吉田　勉　〃　三豊郡財　吉田　豊　〃　奥村　英二　〃
太田　隆　〃　栗田　秀政　〃　仲多度郡満濃　堤　豊　〃　江里口国良　〃
三好　保　〃　横路　正夫　鹿児島県鹿屋市寿　北原　英明　〃　小杉　徳寿　〃
久保　隆　〃　昭和町　田辺　銘子　〃　〃　共楽　開　彰人　〃　坂本　博二　〃
牟礼　徳雄　〃　新田町　甲斐　忠明　宮崎県小林市真方　坂井　東大　〃　井原東洋一　〃
国方　勲　〃　福岡町　奥山　利則　〃　えびの市栗下　坂本　順一　〃　清浦　豊　〃
宮地　博文　〃　林町　志賀　直郎　東京都三鷹市井ノ頭　木田　英二　〃　中村　照夫　〃
岡　博文　〃　視紙町　中村　礼子　〃　港区六本木　重野　征太　〃　木浦　和人　〃
横井　政信　〃　植松町　仁木　宏美　兵庫県明石市大久保　鴨川　豊　〃　浦　敏男　〃
桑田　輝雄　〃　屋島東町　浜崎　利登　神戸市葺合区中島通　州崎トミ子　〃　田辺　寛二　〃
宮田　幹夫　〃　鹿角町　（匿名）　二人　吉田　強　〃　大久保康夫　〃
片山　明　〃　宮脇町　山下　昭光　長崎市入船町　藤田　暁男　〃　飯笹　裕文　〃
中崎　巖　〃　〃　（長崎守る会。事務局長）　飯盛　政美　〃　川添　勝弘　〃

自殺して命果てられた山鹿さんのため、三池労組は準組合葬をもってその冥福を祈った。

毎日を、力いっぱい生きることの意味は

桂分会　石原政子

明けましてお目出とうございます。

災害以来私たちは共に頑張ってまいりましたが、経過観察中だった十九名（三池労組のCO患者）のCO患者の治療と生活補償が打ち切られてから、すでに一年になろうとしています。それらの被災者と家族を路頭にほうり出し、会社は何の補償もしてはおりません。

それに去年の八月十七日には、新港作業所で働いておられたCO患者の松島さんが急に発病され、医師が手術をして見るとすでに手おくれだったとのこと。とうとう帰らぬ人となられました。医学の進んでいる今日、こんなことがあってよいでしょうか。

私たちCO患者家族は、被災者の主人たちの顔色ばかり気にしながら、不安な毎日を過してまいりました。

そんな年の瀬もおしつまった去年の十二月十七日に、これまで長期療養を続けておられた山鹿光明さんが、入院先の三池保養院内にて、自殺してCO中毒症の苦しみからのがれられました。私たちとしては、よそごとではありません。

「死んでいた方が良かった」「いっそ死にたい」と、CO中毒症による苦しみにあがきながら口ばしる主人たちをかかえているからです。そんなにも、生きるということに自信も希望もうしなってしまっている主人たちです。

あの災害以後、十二名もの被災者（三池労組員だけで）が、いろいろな病名でなくなっていますが、下河さんをのぞきますと、みんな"私傷死扱い"になっております。

私はこれらの人びとの死は、決してCO中毒と無関係ではない、と思っています。山鹿さんにしましても、医者はCO中毒の後遺症が原因だといっているのに、会社は、公傷死扱いどころか社葬も致してはおりません。

ほんとうに、私たちは、あの三川鉱大爆発さえなかったなら……とつくづく思います。

会社は、どうして保安を守らないのでしょうか。それは、私たち労働者が、自分たちの命が安く取扱われることにがまんしているからではないでしょうか。

主人たちの、傷めつけられたからだ。そのため、ゆがめ尽された家庭生活。その、果てしない苦しい生活をもささえながら、私たちが力いっぱい生きていることの意味は何でしょうか。

それは外でもなく、三井鉱山に対して、「人間を返せ」「父ちゃんを元の体にして返せ」の要求をつきつけながら、その責任を追及して闘うことではないかと思います。

組合も、いよいよ裁判闘争に起ちあがりました。きびしい闘いになると蛙いますが、生活のすべてをかけて、皆様共ども頑張りぬきたいと思います。

×

新聞"主婦会三川"四十九号から。なお筆者は、CO患者家族の会会長。